

「『どうして中島さんは本物と偽物が分かるんですか?』と聞かれるんですが、“目利き”という仕事は、本物と偽物が分かるのは当たり前です。一番問題なのは、“出世する物”を掘り出せるかどうかなんです。『中島が持っていた物は、あそこの美術館に並んでるよ』だとか『歴史をたどったら、中島がどっかで掘り出したもんだ』とかと言われるように、出世した時には、私のところに物はないんです。残るのは“心の勲章”です。“心の勲章”をいくつ持っているかで、自分の値打ちが決まるわけです」

目利きの達人として知られる、古美術鑑定家の中島誠之助さんだが、本物と偽物を見分けることよりも、将来的に高く評価される骨董＝出世する骨董を手がけることこそが大切だという。

『メッセージ.jp』

中島誠之助さん（古美術鑑定家）

2月20日（火）・2月27日（火）夜8時～8時55分

“日本人の”“日本人による”“日本人のための” ロングインタビュー番組『メッセージ.jp』。この国を築いてきた第一級のリーダーや各界の巨匠に、“時代の節目”の真相や“あの時”の本音に迫る。話の聞き手は文芸評論家で慶應義塾大学教授の福田和也氏。関係者へのインタビュー、思い出の品々、懐かしの写真や秘蔵映像を織り交ぜながら、故きを温ねて新しきを知る。

今回のゲストは、古伊万里を革新的な商法で扱い、“古伊万里の値段を決める男”と呼ばれた目利きの達人、古美術鑑定家の中島誠之助さん。テレビ番組「開運！なんでも鑑定団」のレギュラー鑑定士としてもおなじみの中島さんが、骨董と人生の醍醐味を語る。

「番組の話が来た時は考えましたね。骨董の値段を言うことは、同業者の生活圏を侵害することですし、だまされたやつが悪いというプロの社会でやってきた人間が、おめおめテレビに出てタレントになるというのも抵抗がありました。でも、今では超越しましたね。私の人生においては、古美術商もひとつの過程なんです。マグロ漁船時代があり、修行時代があり、古美術商時代があり、そして次の時代がまた来るわけです。過去は捨てていくんです。テレビで、本物と偽物をはっきりとコメントするには、プロを捨てなきゃだめだと思ったんです。ですから去年、東京美術商協同組合も辞めて、完全に足を洗いました」

テレビ番組では人気鑑定士として鋭い鑑定眼で活躍中の中島さんだが、テレビ出演にあたっては、古美術商としての過去を捨てる決心があったという。

『お前は“捨て目”が利かないからだめだ。“捨て目”が利いていないと、この商売はできない』と親父に言われました。視野に入ったものを、ちゃんと目で拾っておかなければいけないんです。何気ないしぐさで見るとですね。“捨て目が利く”ということ学ぶのが、一番の修行でした。ですから、具体的なものは何一つ教わっていませんし、教えてもくれませんでした。『分からないやつにものを教えたって、しょうがない』と言われて悔しい思いをしました。常に戦いでしたね」
養父の経営する店で厳しい修行時代を過ごした中島さん。教わったのは、具体的な知識ではなく、“捨て目を利かせる”という目利きの技だった。

「骨董屋は1対1の商売だから駆け引きがあるんですが、それを1対10万や1対100万の商売にするためには、値段をつけなきゃいけないんです。数百点の古伊万里を狭い店の中に詰め込みまして、全てに値段を付けました。だから、よその業者が隠しカメラで値段を写していましたね」

それまで価値の低いものと見なされていた古伊万里に注目した中島さんは、1976年に青山に古伊万里の専門店「骨董屋からくさ」を開店した。ガラクタを売っているとの非難の声にもあきらめず、新しいかたちの商売を推し進め、“古伊万里の値段を決める男”と呼ばれるようになった。

「コレクターや買う人の立場から言うと、『欲を持つな』『もうけようと思わない』ということです。もうけようと思わないで、自分が気に入ったものを買ったり集めたりして打ち込んでみなければいけません。もうけようと思いき過ぎるのは、知り過ぎているということなんです。知識という土台の上には欲しか立たない。感動という土台の上に知識が立つと、美の殿堂という家が完成する。まず感動して自分が好きだと思ったものや心が震えるものに飛びつくことが大切なんです」

コレクターへのメッセージ。もうけることを第一に考えるのではなく、感動した気持ちを出発点にして知識を得ることが重要だと主張する。

「若い人は頭が柔軟な間に、いろんなものを夢中で吸収してほしいと思います。飛びつけるものに飛びついて、夢中で突き進んでみる。探究心、興味、情熱を失ってははいけません。そうすれば必ず先に道ができてくる。恐れちゃいけないんです。人生を恐れるようになれば、欲が強くなる。古美術商でも30歳を超えるまでは、10万円しか値打ちのない物に100万円のお金を投じることはできるんですよ。35歳を過ぎてくると、だんだん人生が怖くなって欲が強くなるから、100万円の値打ちのものを、どうやって10万円でかすめ取ろうかと思ってしまうんです。だから、もうけようと思わずに、いろんなものに飛びつけ、と言いたいです。」

若い人たちへのメッセージ。さまざまな可能性にチャレンジして、自分のやりたいことに打ち込むことの大切さを訴える。